

『宇津山小蝶物語』翻刻(二)

岡部 祐佳

本稿は、国立国会図書館蔵『宇津山小蝶物語』巻四〜八の翻刻である。巻一〜三の翻刻および凡例・解題については、本誌前号に掲載されているので、そちらを参照されたい。

巻四(副題:捨舟)

宇津山小蝶物語第四巻目録

御心悪も嘯也

神の木は枝も打ず
左のひざの五寸上
名高きは御室の花

友達は寝屋迄

望の違ふおやご、ろ
兒に紅葉をちらす小娘
俄に留る鞠の稽古

知ら居か高野道

内外の替る書付

大坂に多きすつぽん

心からなり三世の闇(1オ)

百年の老女何性ぞ

明れば廿四日の夕暮に、外母何心なき体にて参りければ、お姫様うれしげに「是へく」と奥座敷にてなどやかなるお咄し。うば申やうは、「夕部はお地藏様参りなされませなんだか。『若御立よりも遊ばすか』と心まちに御座りましたに、何となされました」と申せば、「さればいの、心わるふてゑまいらなんだわいの」「む、それなら御尤」と、人はなし。「なふ、先度の事は何となされませぬ。わしも心もとなくて度く源殿に尋ますれば、御前もあんまりよ。どうよくな事で御ざりますぞ」「ゑ、またわけもない事いやる。その事はすきと埒が明た。言出しやんな」「い、ゑ、埒が明ませぬ。爰へも文ことづかりて来ました」「つがもない人じやわいの。かやしや。(1ウ)源七にもいふ通、ふつく請とらぬ。返事もせぬはづじやなふ」「そのはづは誰がきはめました。御前の御心まかせに仰られても、わしが折角持て来ました」「なぜにうけとつておじやつた」外母聞て、「いやなふ、これはちたいわしが使う筈の事なれども、態今までひかへました。早ふあけて外母にも聞さしやんせ。何と書てあるぞ。本にわしさへ心根がいとしようてならぬ」とさしつくやうにいへば、ちからなく請とり給ひ、ふたりともに方燈の陰にて見れば、

知らせばや、塩焼海人の煙さへ、おもはぬ方へ靡ならひを、檻に風の動かす塵までも、君のかたより便有。人音かと兒形の立添ぬ隙もなく、明るやら暮るやら只愛襲いとおしく、休ぬ我が心からよすがく(2オ)尋ぬれば、その後は御とりあげも絶ぐに聞へ申候。それは余りに御心強し。繫がぬ駒に乗

まじきか。御室の御所の桜花、見る人なくば名もあらじ。彼中將の若盛、二条の後の御情、いまさら譏る人もなし。小野の小町がなれる果、か様の事はおのづから、君のやうなる御心つよき戒なり。申に及ばぬ事ながら、しりても心にしらざれば、知らぬより猶しらぬなり。君がまた神の木にてもあらばこそ、それとても若はまた御心の底ふかき妹背の殿も候はゞ、身はいたづらに朽はてん。世をも命も露ほどもおしからざりし我身なり。嗚やさぞ、拙き筆に賤き文、御あざけりのはづかしさ常ならず候へども、恋のやつ(2ウ)こと成参らせ候ゆへ、お返し御機嫌を伺ひあげ参らせ候。適々低く肘枕にも、面影にさへしばし物うし。

姫君よに優げに誦終り給ひ、「外母の折角請取ておじやつたほどに、成ほど貰ふておこけれど、併返事は多すまい。誠におれが様な者に心を尽し給ふが気毒じや」とばかりなり。うば聞て、「いや〜、なんぼでも御返事をなされませ」「それはゆるしてたも」「いつかな事、ゆるしませぬぞ、いつ迄も聞ませぬぞ。少はまたやさしい御心もでけさふな時分に、つるぎのはを渡るやうな御返事をなさるゝうへにも、あのごとく『いとしか可愛』となどやかに書いて越給ふに、先何としたけんそな事して御座りますぞ。わしさへ心根がいとしようてならぬに。これ、おごりよん様」と引寄せて、(3オ)【挿絵】(3ウ)【挿絵】(4オ)うばの心易ひには少もはたらかせず、膝のかみを二つ捻りはらくと泣てかこてば、君も専むねのほどもだ〜と、恋と情と身のうへとに

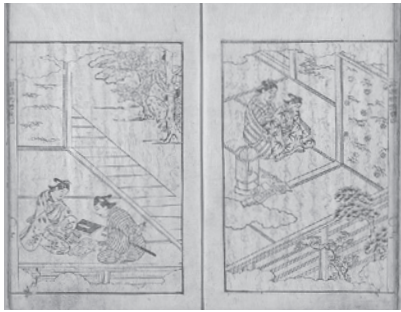


図1 卷四 3ウ・4オ

御声揮ふこはねに、御なみだ外母が腕にかたびら二重絞るほど流させ給ひて、「そんならばの、『忝のふは御ざんすけれど、ゆるして下されませ。御返事はなんぼにもえ申すまひ』とわしが申す」といふてたも」とて手を合し拜み給へば、うばもいよ〜涙をこぼし、「そんならまづそふ申まつしよ。それが御発憤事か」と、天窓なる櫛とつて御兎へ掛る髪撫付て立て戻れば、送り出給ひ、手をつかまへ袂をひかへて「能おじやつたや」と仰られし。

二千里の外も恋の世(4ウ)

それよりは文とり続る事も無望人、何かと暮す中に八月のはじめに至れども差別もなく、何がたゞにさへ秋は物さびて虫の音までもあはれなるに、長夜に結ぶ夢もいろ〜に心なく、伊織はいよ〜おもひに沈み、四五月の時分よりは一際瘦で、日にはあくびの八千も出る、いかさま恋はせつなるものなり。扱も此年月住馴に、柳原の一字屋重右衛門は四年以前に世をはやし、則其妻は新黒谷の桑門蓮海房の妹なりしが、様義発明世にこへ、死たる男の名も下さず、おのが身持も人の口に懸らず、十七人の世渡りもていねひに住なし、二季のなし扱ひも楽〜と暮らすにより、今年で十六になるおすがといふひとり娘ありけるが、幸かたち(5オ)うるはしくしなものにて、かしこきゆへに後家育の様にもなく、縫ものはいかな羽織やもあごたをくひ違るほどの手き、成により、「三間口に裏行十七間の家に金子五拾両」また「西の岡に上田壱町五反に椿まじりの平藪共に付て」など、いふ入聲の肝煎数多来れども、六づきに談合仕ちらかして置て、「やつぱしおけ。あのみ濃から来ていやる人を、便ぎよくは遺跡を譲らふぞ」と思ふて過しつれ共露ほども色には出さず。月日を送るほどに親の心子が知て、「なんでも是はくるしからぬ」とおもふから随分と女の一通を心に掛、庭に立おとこぎれにはすりちがふても通らぬほどに身をたしなみしが、

何様、娘の子とたばこの火とは気をつけたがよいはいつのほどからか、(5ウ) 伊織がうか／＼とするをしりくさつて、則中松が楊弓の友だちに山崎休育が性、今年十九成宮之丞とて容顔美盡の若者、折毎にぬめりをかへしなづきぬるを、ちらほらとかい見え互にいなげな目つきするを、ひよこの様な伊織どの我身のうへにつまされ氣を通し、吞づらき茶を「今一つ」と乞、「あの障子さして下されの。そこへ枕進ぜられの」と、さしての事なきにつかふも一人の情なり。折にふれては態すりぬけて二人にして少の間は置どもろくに手さへにぎらで、むねに恋慕のあやくたをはきたためすしぬるを剛者が見たらはがゆかろに、中立も氣は通せどもぬれの師匠には中／＼かいなき面の皮。されども、かんじんのおそろしい親の貞春がいおり(6オ)に心をゆるせば、時に寄りもたれか、り、すりよりこそぐりなどする計こそ恋の卵なれ。ある時、伊織前裁に下り隠れ居れば、二人の者ども寄りもぢやくぢやくとはすれ共心、計にて横に成かねしところへ、態だましてつとあがれば手持わるく見えるを、「これ／＼、隠し給ふな。随分通て居る相ほれば、おもしろい事があるものか。小毎が出来たらば命かけてさばく氣じやぞ」と、引ちらしたる万葉集をつきのけて二人をつきかため、口の間に鼻歌などにて「人をふせぐ」といはん計のしかけなれば、胸のはや鐘つき立てものもいはずに、四月廿七日は小袖一つにて裾通す風のなまあつし。「千早振神のみことの古より此所久しかれ」とこそ、三番(6ウ) 三は一日の能にも祝ぬることぞかし。出雲八重垣の歌の姿も何とやらひゆかしくおもひ出られて、その以後は人こそ知らね、雨雲に龍の望がごとく、二つもなく三つもなく一つおもひの園の竹、鶯こそもおつになり、人目の関守、恋すてふ我名はまだき立にけり、人しれずこそ思ひ初しか、忍ぶれど色に出にけり我恋は、物やおもふと人のとふまで、折に寄ては逢はでも帰し、ことにふれては言葉計にうち別れ、そよと取手枕も結び

ながらの下ひも、さ、め言いふ隙もなくかごと計の情にて半年余り契りしが、いづれ手釋かけても働かねば仕事が出来ず。主ある池は物すごとく、ふり積る庭の雪も土くれを新し、家鴨の子は潦にもはや態我下腹を湿らすとかや。(7オ) 母親の思ひ入すじかに違ひて、ろくに有所も知らぬ宮之丞がくみとめるを物臭くおもふて、氣を付けて早速に見付、以の外に腹立せしめ、「とかく人に科はなし。我娘こそいたづら者なれ」と大きやうにすれば人の口もさすがはぢかはしく、ゑぐりわるふこし本へ引付をきて、下手のあがりやのごとくに折檻すれば、おすがは棚にある鼠さへ見ぬふりして、ため息の下に念仏まじりなり。男も門までゆく事も叶はねば、伊織も鼻ふさひで居る。宮之丞は打ふして煩らふほどにもあらねども、心重たきが何ゆへぞ。おやのいさめ世のそしりつ、むに心のいとまなく、よどの、ねざめにみだれぬるびんの髪も撫つくるに甲斐なく、外にあらはる、色うるはしき(7ウ) 形もおとろへば、何が親の休斉は近年借しがねの仕合はよし。武拾六七貫目の家屋舗ゆづるべき一人子なれば、いろ／＼と氣つかひして能聞ば、此おすがが事幸有増知りては居る。俄に相談して両方の跡色まろめて、渡す筈の祝言取組こそ心地よけれ。伊織も身のおもひあるにもねたみなき事なれば、海老の船盛によはひのながき目出たさ、いかさま人のいもせも「悪かれ」とはいのらぬも、志賀の都よりそねまぬ九重を、

千早振賀茂の社のひめ小まつ

よろづ世ふとも色はかはらじ

見舞といふて少は見る事

八月十五夜は望月とて秋の最中月の賞翫にて、(8オ) 心なき賤のふせ屋にも遠国の山里にも只にはあらぬぞかし。左京様御夫婦たちは、御まかなひのこや中使の角前髪、御出入の忠次郎、こしものとのめなど打つれられ、六原の花藏院にて音羽の峯にほの出る月を御

覽ぜんため、折から清月にて暮ちかづくを待かねて御遊興なり。外母も暮ぬうちから来りて、内かた賑声に里芋喰ららし、取おとしておけば九郎介や三太がすべるも可咲。下女半下はかみをすき、或は草さうしを誦うた、ねして蚊にくはれ尻をた、くもあり。奥には御姫様、うば、源七なり。然所に、はしより「是源七どの、どこからやら状が来ましたが置いて帰りました」といふて渡す。やがて見れば、伊織が手跡にて上書に「さらば」とあり。（8ウ）こゝろもとなくてひらけば、

書置の事

「何、只今迄は忝ひ。扱は拙者儀、御存知の通少々望申事候へ共、此ほど不通と首尾致さず候ゆへ、さして思ひ残す事もなき身のうへにて御座候により、いらざる事に命をしまらんよりはとぞんじ、今日八つにたち、高野へ引籠り申候。最早今生にては逢申まじく候。若山にても早速師匠も取得がたく候は、それが此世のかぎりに麓の土となり申べく候と存候」と書たりけり。源七泪ぐみ声揮はせ、「これ見給へ、おうほどの。此ほどはふつゝたよりもせなんだによりおもひつめたと見えた。扱も可愛や、日本一の優男が諸はぬ恋に身を（9オ）捨、さぞや口惜かる」といへば、外母もお姫様のかた向て、「本に能後生願ひの人間一人すたつた。何の出家にならりよ。大坂の橋杭に懸り、すつぽんの飯米に成給ふべし」といふ。君もかなしさをやる方なく、「なふ、追かけて留ることとはならぬか。源七もきつい人じや」との給へば、「誰がきついやら知りませぬ。それは御前次第でござる。文の返事がまいらぬにより此ごとくになりくだりました事なれば、ちよの事である男めが能かへろぞ」といへば、「そんなら文の返事はなんぼなりとせふほどに、とめてたも。おれも剛ひ」「定さうでござるの」はて、返事はせふほどに早とめてたもの」「返事もおなじ様な事ばかりならさくまひべや」「何をいやる。そんな事が今からしれる物か。たゞ返

事（9ウ）【挿絵】（10オ）いたしましよ」といふてとめや」「さて、さればよくせき思ひ閉たと見えましたにより、何とあらふも知りませぬど、まづとめて見ませふ」とて宿に居る下男を呼に遣



図2 巻四 10オ

り、「飛脚の与さへもんが子の七郎兵衛と、またどれなりと今一人随分はしれ。あの煩ほれて居る者じや程に道は遅かる。行あはず似た者もなくば、吾人はくらがりとうげに待て居たが能かる。また一人はふもと迄いきや」といへ。かくれもない男じや、後に釣髪の跡が有ぞ、左の顔さきに黒痣が有ぞ」といひ付てつかはし、しばらくすぐれば皆月見より御帰り、さらさん顔にて寝所ぐにいられり。其翌日に、「さあお姫様、つれて帰りました。まづどう成とも文一つあそばしつかはされませ」といへば、「あ、せはし（10ウ）ない事じやぞ」「またそれがわるい。又我等の偽りになりては気毒に候」といへば、「しんきな事じやぞ」といひすて奥に入給ひ、二時ばかりへて二へんふうして源七下されけり。やがて手づから持て行、お姫様御覧じ「これ源七。そなたの見やつたらさかぬほどに」「はて扱、何のあれがよふ見せませうぞ」といひ捨てはしり行、伊織にあたへければ、押戴き元三大師の書付を讀ごとく、

また改めていま更に御はづかしく候へども、心計にあらく申参らせ候。誠につねならぬ御ふもじ、どれぐもいたいけにあそばし下され、詠入参らせ候へ共、逆も御げんなる事もなりまいらせぬ事ゆへにとぞんじ、すて置れぬやうに仰せ下され候へども、いなどともえ（11オ）進じ申さず候。其うへ三ヶ条の御戯も、成ほどにくげなき御しんもじ、とりわきて愛らしく思ひ参らせ候へども、まゝならぬ御事あり参らせ候により、たゞ何事も一向に御免しをのみ庶幾まいらせ候。扱また、去し折

は御心みじかき事を承候により、何とぞわたくし方より御託言を申たきまゝに、縋り参らせ候へば、さつそく御しづまり下され、生々世々かたじけなさ何とやら、我事ゆへのやうに聞へまいらせ、めいはくさたとへかたなくぞんじ候。扱又此かた事、「余所に心もあるか」と仰られ候。実から何のすべもぞんじ申さず候。此やうなる文なども今をはじめにて御ざ候。すゑくゝとても誰人の(11ウ)妻になりともなり申候はゞ、そもじ様の御手にかけるべく候。近きうちに出家いたし候ほどに、是にて御うらみ御ざ有まじく候。何事もひとへに御ゆるし候。かしく。

残おほきかたへ

こてうより

源七も有増聞て、「其うちまた文を越給へ」と言てみたちに帰れば、門前に入出ものさはがしく、内外上を下へとかへす事、たゞ大船の波に沈にひとし。「何事ぞ」と問へば、「日暮より奥様御しやく常ならず指出、一両度も御脈が切し」といふ。大きにをどろき、「それ御薬の水に氣をつけよ。人參火取か、灼すな」などと、今歸りていふも、てには移らねど色くとして夜もまどろまず。(12オ) 医師針立の入替る事庭掃除もなく、漸一日二夜すきて少しづかになりしかど、いまだ持声にて物いふほどにもなきところへ、伊織方より各別の縁をもつて源七手前へ状を越けり。見れば、ふうじ紙の梁に「能やうに頼」とばかりかきて、中には御姫様への文なり。やがて片はらに立寄あらましを書いて、「まづ此方より便りするまでは御待」と書て遣し、少の際に目ませ仕て渡せば、御顔尖らかしながら請取給ひ、母子の御枕もとさり給ふいとまあらねども、すこしすやくとしつづまり給ふ間にそつとすかし、袋だなの下にて見給へば、此たびは笠もとりあへず高野山、紅葉の散も見残して都をふかく離れしに、おもひもよらぬ御ことは(12ウ)をうけたまはり候により、面目もなくすくゝと立歸り申候へば稀の御墨付を

下され、さなきだに空行雲までもうらやましくねたましく存候に、わたくし発心御心につけさせられ、やさしくも宥させ給ふ事、浅からぬ御情、何がさて、とかくは君の仰なれば、據御さなく候。然らば君にも御出家を止り給ひ、俗にて後世を御願ひ下さるべく候。数ならぬ身を不便と思しめされ候はゞ、御髪をだにおろされず、折毎に御あはれみの書捨なりとも下され候はゞ、わたくし三世の闇あかく成申さん事、君ならずして誰人か知るべき人は乾坤に覚えずと、一すじに存たてまつり候。(13オ)

夕ぐれは雲のはたてに物ぞおもふ

あまつ空なる人をこふとて

駿河なる田子の浦浪た、ぬ日は

あれども君をこひぬ日はなし

人しれずおもへばくるしくれないの

すゑつむ花の色に出なん

忘らる、時しなれば芦田鶴の

おもひみだれて音をのみぞなく

夏むしの身をいたづらになすことも

ひとつおもひによりて成りけり

東路のさ夜の中山中くゝに

何しか人をおもひそめけん(13ウ)

我をおもふ人を思はぬむくひにや

わがおもふ人がわれをおもはぬ

姿心の違ふ君へ

はづかしき

身より

姫君も御袂の下にて読いらせ給ひ、「扱もふかき人心や。折もこそ母様の御労は何事ぞや」とおぼしめし、源七にちかづかせ給ひ、「此ほどの御返事書てつかはす隙もなし。いかゞや」とさ、やき給

へば、「御尤ごより」。今の中は程へても労働ろうくわんからず候。此方の隙ひま入り、それがし方より申遣つかはし候」といふ。「扱あつかも嬉うれしや〜」とて只おく様の御枕ごまくらもとにつきそひ給ひ、御心づかひ繼つぎ絶た。さてしも節せつなる御情ごせいきいつの間には遊あそばしけん、うばがもとへ御文一通ごぶんいつつう音信おんしんけり。うば持て行いば留とどまなり。やがて硯箱すずりばこに入いて帰かへる。(14才) 伊織いおりは文のつて遠とほざかりぬるも覚悟かくごなれば、此ほどは「彼君かのきみの御母ごははうへの御本腹ほんはらあるやうに」と、神社じんじや仏閣ぶつかくを身を清きよめおかきまりてありくぞ真事まことなれ。帰かへればこの文かたじけなし。「天てんのあたへ」と押おしおいたまき見れば、

御手跡ごてまかりにも捨すてくには御ごさなふ候へども、このほどはまどろむ隙ひまもなき御事ごこと有あり参まらせ候ゆへ心の外ほかになり、御機嫌ごきげんいかゞと存ぞんあら〜申ま参まらせ候。せんもじも、わが身事みこと「出家しゆつをとまり申ま様に」と御折檻ごせつかんなされ下くだされ候へども、たとへとまり参まらせ候へども、そもじ様に添そひ申まさねば御ごためにもなりまいらせず候。わたくし心中しんちゆうには人知ひとしらぬ深ふかき望のぞみ御座候ござ候ほどに、ふつ〜覚おぼしめし切きせ給ひ、そもじ様さま（14ウ）御事ごことはわたくしと覚おぼしめし候方を友ともに中なだちいたし申まべく候間、御慈悲ごじひにみづから事は剃髮ていはつさせ下くださるべく候。このうへながらの御情ごせいきにて御ごさ候。いまだがせたる身みにても御ごさなく候程に、たゞ返かへす〜も御聞ごき分わけなされ下くだされ、御ゆるし給たまはるべく候。かしく。

読人の

其心ねは

世の中はかゝれとてこそむまれけめ

しらねども

ことはりしらぬ我なみだかな

中松心におもふやう、「いや〜、御返事ごへんじこそ遅おそくともわれにさしたる貪着とんじやくなし。少もこれをば透すかまじ」と、

御理ごりをきくからに、飽あかぬは君きみのなさけかな。なるほど〜、御もの思おもひもわが身のうへよりいか（15才）ほどかぞんじやり察さし暮くし候。つきましては「御出家ごしゆつ御とまりなされても其甲斐かひなき」との御仰ごおほせ、またそれがしに「おもはぬ人に心を寄よせよ」と

は、さてもあさ〜敷しつくれなき御しんもじや。男おとこを立たるも君御俗ぞくのうちなればこそ、今にも方様のことはりなしに御黒髪くろかみを剃そ給たまは、我身わがみは何なにとなら坂さかや、このてがしはの二心にしんなきしるしには、本もとより心に巧たくみ置おいかなる山やまにも引ひこもり、此世このよこそは叶かなはずとも、生替いきかり死替しにかり、煩惱ぼんぷの犬いぬと成な御ごめぐり逢あひ逢あつつきそひて、「契ちがいで何なにとなるべきぞ」と片時ひとときも心にいとまなし。さもあらば、いつかに君の御心ごこころひとり清すまませ給たまふとも、我わが一念いっぴん（15ウ）のはなれまじ。それとてもちからなし。是非せひにとまり給たまはすば、それまでは恐おそれながら我妻わがつまなり。「責あて御心ごこころのひもをゆるめ給たまふ御遊成ごゆうじやうとも給たまはれかし」とこひねがふ身こそつられ。歌かたの、

我恋わがこひはみやまの奥おくの郭公かくらう

人こそしらねなかぬ日もなし

うた、ねに恋こひしき人を夢ゆめに見て

うつ、にかこつわがなみだかな

日の本の神かみかけて偽いつはりりなし。

物の哀あはれを知らぬ君へ

思おもひきらぬ

身みより

四之巻終よのまきしゆう（16才）

卷五（副題：岸の柳）

宇津山小蝶物語第五卷目録

恥敷ちぢながら泪川なみだがは

うけたまはるに下心したしころこぎ御座候

遅々ちぢぢと出る月代つきよしろ

なるほど油付あぶらてすき給へ

心を包絹なし

御才学の占

手洗水の禁制

一くさり読れぬ歌書(1オ)

賤しからざる爪の取様

姫君も此文に御心の底より世に嬉しく、「またと類のあるべきか。かやうの男を持ってこそ」と下心には御発心の思しめしより、「跡かたなく成給へ」と母君の御煩にかいやり捨て御座。かくて日数たつほどに、九月十三夜の月も御内に一人として其わざもいはず、もとより鞆大豆喰た者もなし。一家ひつそとこほり切て、明れば十四日、奥様人ぐにすしく御暇乞ありて、高橋を近く召され、「何事も其方を頼をく。たゞ心に掛るは姫が事。他人の唇にか、らぬやうにおごそかに育給はれ」といとこまやかに御遺言有て、念仏の声幽にちぎみて、午の下刻と申には、御年三十九才にしてねぶれる(1ウ)やうに失給ふ。姫君をはじめ御一門人目を知らず声立て、膝もたもとも鼻紙もはしやく所はなかりけり。扱しもあるべき事ならねば、十五日の末の上刻には、忽のかれぬあだし野の煙くろくと、それさへ烈敷松かぜに、後れ先だつ世のならひ、定なきこそかなしけれ。角て七日くの御いとなみ、月忌になり、七々七日つなぬ月日こそやるせなき。比しも中の冬十日あまり、百ヶ日もた、ざるに、中松がかたより千話文か玉章か、捨置れずやがて参るべきかたへさしあぐれば、

泪川にた、せ給ひ、さぞや物うくおはしまし候はん。あつかま

しき申事ながら、此かたにてもけうとく心を憫め申候。しかし

はし

飛鳥川せきてとゞむる物ならは

なれば

ふち瀬になると何かいはれん

こそ

と書て、墨薄く封じ目もよげてあり。姫君も御心ほそきと恋風とに、なつかしさふな御言葉にて、「源七、何と返事してやろか」「あ、扱、仰に及びませぬ」といへば、心静になされしをうけとり、急つかはしけり。おしひらけば、

覚しめしより御勞の水茎を下され、かたじけなく詠入参らせ候。此ほどの物おもひ、わたくし心体を御推量下さるべく候。いづぞやもこまぐとの御ふもじ、なるほどうけとりて読でしんぜやしたぞや。其ごとく御間分もなく毎をこめて御しかり下され候へば、(2ウ) 無為方御ざ候ほどに出家になり申事はとまりて進ぜやんしよ。是にて一つ御心にしたがひ申候うへは何の御申ぶんも御うらみも御ざ有まじく候。何事もなければ先度のかく様のまぎれに、すべあしくとも年月の望をかなへ申はづなれども、そもじ様ゆへにおしつけて居参らせ候。しかし是までにて御ざ候間、御文もかならず御無用になされ下さるべく候。命ほどつらき物もなし。たのみすくなき身ながらも、一日くくらし居参らせ候。かしく。

わが身の恨

に 草ふかきあれたる宿のともし火の

きこへ かせに消ぬは蜜なりけり

申候により

叶はぬ事を思ふかたへ たのみなき

身より(3オ)

好清も雲行のなをるに付て力を得たれども、根心はおもしろて只くさりかたびらを着たるやうに打聞へ、おもはせぶりに書なしても文の便りをきらはれ、何共はたらくにとびつかれず。「捨られればこそむねくるしや」と、ひや酒一つ呑んで「なんのその」と、

情ある御筆色ながらそれは一つも聞へ申さず候。もつとも、わたくしが申事御取あげは辱候へ共、「文も越な。これまで」

とはそれにて何の御情が御さ候ぞ。いつそ「死ね」と仰下さるべく候。片時もながらへおもしろからず候。いやでもおふでも、此御返事次第にたしかに存さため申候。さぞや右流左死覚しめし候はんずれども、今日は命の蓋を取はじめ申候ゆへ(3ウ) 少下配をいたし参らせ候。

とて、左の小指半に切文箱に入、態手を揮はせ書ちらし、「忘れ路の行末まではかたけれど」、書てつかはしけり。お敵様何心もなく請取給ひ、文箱あくるやいなや、「はあ、さても是は」と胸さはぎしきりにて、源七に知らせんも場広くならんをはかり給ひ、うれしくもまた悲しくて、「ゑ、口おしや。我心限りもなくふかき故なり」とひとりごちしておはせしが、そゝろ心を取直し、「是ほどの事なくば、なじかは二世と契るべき。さらば瘥してやるべき」とあそばす文こそゆかしけれ。伊織は指さき芯で包、「此返事が絶体絶命よ。何様くりきなくては」といたゞき見れば、いつよりもくろみすぎて、(4オ)【挿絵】(4ウ)【挿絵】(5オ)

我はなを思ひますほの糸す、立ぬべき浮名を兼ていとはずは、さても短き御心や。君も真ぶかき恋知りと見うけぬればこそ、わが心にいらぬ事ならば、身は八割になるとても一字にても書進ずべきか。浅く敷おちん女をいみじく覚しめすかや。方様の御心よりみづからが大節に大事におもふて居る御身に、なぜに断なしに疵をつけさしやんした。本の様になをして返し給へ。わしははじめて御文の時分より、底心には「もはや主あ

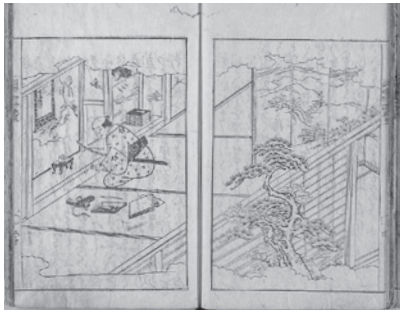


図3 巻五 4ウ・5オ

る身じや」とおもふにより、前にも申ごとく母様の空しき折にも髪を剃らず、陰ながら其もと様に見せるとおもふて居(5ウ) ました。悔しや、それほどにおもふまひもの。扱まづせつかく下さんしたけれど御指はもどしますほどに、いまだ間もないうちに何とぞ本のやうにつがなせ。さもなくば、ぢきに囉ふてわしがまもりに入ます折も御さんしよほどに、今から此やうな心やなど持んしたら、ほんにものがちがひましょ。きついぞや、きかぬぞゑ。かしく。

紅葉ばの色に出すな手折とも

しのびて通へ山の下みち

たんき者の

安方めサマ

いとしかる

十四の女

伊織此文を引ひらきつやくと打詠、「さてく、心といひ形といひ、この御心ゆへにこそふかき恋路に置所(6オ)なくすごし給ふと、そも我目利の違はぬ所こそ嬉しけれ」と安堵の筆を取あげて、それほどにせつに覚しめし下さるゝとは、今こそ真成に知れ申候。此かたの義は身をうらみてのわざに御さ候へば、かならず御あんじなされまじく候。最早たゞ死ても本望に御座候。折をえて積る御事もあかし申べく候。よふもくいま迄は物を思はし給ふ物かな。「彼深草の少将も我心にはもののかは」とのみぞんじ候。あなかしこ、籬くゞるな女郎花。

きのふまで余所に思ひし菖蒲草

けふわが宿の妻と見るかな(6ウ)

比べものなき人へ

ふきさする

身より

様が黒みて殿に成けり

姫君是を見給ひた、んで押いたゞき、一兩日程はすごし給へども御

心休む事なく、

御しんもじもあからさま、我心しんたい体たいも包つつむべき絹きぬも衣ころもも君にとら
れ参らせ候うへは、ちか比ごらのはづかしさも覺おぼえ申まさず候へど
も、実じつから何なにのすべもぞんぜずながら、此こほどは君きみの事ことのみお
もひ暮くらすにつけて、少ちと々とくせいがかくぞぞえ。わしが事はいか
やうにも、御心ごしんまかせに背せま申ままじく候あ候う。只ただ御精ごしんのつきぬやう
に御ごげんなる事ことばかりを御ごままじく候あ候う。此こうへはちとく御
身みもちが(7オ)むつかしかる。ちとなりとも、うかくとあ
く性しやうな余よ所ところご、るなどありまし候あ候うは、物ものが違ちがひましよ。此こかた
にてそもじ様御身さまごしんのうへ、毎まい日にち占うらををまき申ま候あ候うにより、みなく
しれ申ま候あ候う。女をんなの手てから何なにによらず御ごとりもいやにて御ござ候あ候う。た
まかに御ごくらし候あ候うべく候あ候う。もはや文ぶんとでもくさんすな。心こゝろさへ
替からねば別べつの事こともなし。また文ぶん共ども誰たれにも御ごかくし候あ候う。蝶てつになり
たや羽は子こ有あ蝶てつに、今いまは我われ名なもその甲斐かひもなし。

我恋われこいはすがた形かたちも見みぬ君きみに
心こゝろは日々ひびにあはぬ間まもなし

わがとの

したふ

伊織いぢ様参まる

身みより

好清よしみよむ読よみ身み節せつなえて、(7ウ)

しのお山やま、忍しのびて通とほふ道みちもがな。人ひとの心こゝろの見るまではなけれど
も、直ちぐく御ご口くちもとを見ていはしたや。何なに事こともかしこまりた
てまつり候あ候う。やつがれがわざ物ものか知しらせ候あ候うよし、願ねがふてもなき
仕合しあは悦よろこなり。若わ露ゆほども不ふし中ちゆうなる余よ所ところに心こゝろの有ある参まらせ候あ候う
は、此文こゝろをもつて早はや速すみ命いのちを召め上ありあるべく候あ候う。たゞ君きみこそ覺おぼ
束つかなけれ、男おとこの汲ひし水みづにて御ご手て水みづにてもあそはし候あ候うは、恨うらみ
その底そこをしらず候あ候う。本もとより雪ゆき踏ふ木き履ぢにても何なにものによらず、男おとこ
のとりなをし申ま事こと堅かた禁かへ制せいにて御ござ候あ候う。如かく此こののやから某ま申ま分ぶん、
少すこにても御ご心こゝろに懸かり候あ候うは、急きつ度と仰おほ下くださるべく候あ候う。(8オ)

狂歌

君きみとわが中なかつは夜よる昼ひる魂たまの
袖そですり違ちがひ逢あはんとぞおもふ

かならず、死しなば一所いしょにて御ござ候あ候う。石いし塔たも一つにて御ござ候あ候う。
妻さい女むすめ

小てうどのへ

中松伊織なかつら いぢ祐すけ

ひめ君も恋こいのうきはし踏ふめて、引ひは帰かへさじ梓あづき弓ゆみ、念ねん力りきの矢やの一いち筋すぢ
に通とほりすぎたる御ご心中しんちゆう、誰たれかはそれと白しろ板いたの、あたらしき箱はこをしつ
らひ、草くさ結むすびよりの文ぶんどもを、折おり目めも誰たれか違ちがへべき。此こ折はからより
は、なを互たがのおもひに冬ふゆの日ひの短みじきをくらしかね、夜よは猶なほ物ものうき折はり
しは文ぶんをひろげついたゞきつ読よんでみつ、絶たへかね給たまふぞことならね。
「しばしまぎる、事ことも(8ウ)がな」と、常つねに御ご手てのもとさらぬ二
十一じゅういち代だい集しゅう、源げん氏し物ぶつ語ご、古こ今こん、つれづれ、虫むしづくし、伊い勢せい物ぶつ語ご、枕まくら
草くさ紙し、小こ衣い、栄えい花か物ぶつ語ごなど打な詠えいあかし給たまへども、思おもひうちにあれば
一いちくさりとも読よみ話わ給たまはず。人ひとしらぬ心こゝろをつくし給たまふ所ところへ、伊い織いぢが方かた
より音ねづれの文ぶん。「とうとや」と見み給たまへば、

此こゝろほどは打な絶たへ参まらせ候あ候う。けしからぬ寒さむさ、殊いし更さらきのふよりの雪ゆき
のあした、諸もろ共どもに詠えいまほしくおもひまいらせ候あ候う。源げんどのにも此
ほどは御ご咄はなしもなく候あ候う。拙さつ者しやも余あまりのうれしさに、「君きみ御ご心
とげさせ給たまふ」とはえ申まさず
候あ候う。しかし待まちかね申まも真まこと実じつ、
おもてぶせく候あ候うへども、密ひそかに
御ご盃さかづなりともとぞんじくら
し参まらせ候あ候う。「行ゆとしのをし
くも有あかなますかゞみ」(9
オ)【挿絵】(9ウ)とやらにて、
しめ声こゝろに語かたらん事ことをおもひをく
あはれふたりが逢あはれ夜よなりせば



図4 巻五 9ウ

ひめ君くはんぐと打う黙もく頭づか給たまひ御ご返へん事ことなされ、「源げん七しち、これそなた

直に持ていてたも」畏まりました。幸此ほどは御物遠に候に」と
柳原へ行わたせば、片わきにより読でから「いかに国定どの、これ
を御覽じ何とぞ宜やうに頼む」といふ。何事かと見るに、

こなたにもかるからぬこひしさの折からに、よくぞやしみてく
と書て下さんした。我身事も其ごとく思ふばかりに御ざ候。こ
れほどまで心のさがをあかし合ふうへに候へば、近きうちに
二人の衆を頼御げんもやと存（10才）御事にて、「夜もすすら
物おもふころは明やらで」にて、

いとせめて恋しき時はうづばたまの
夜の衣をかえしてぞ着る

高橋横手打て、「これはいかな事。此ごろは何やら角やらにとり紛
て、是程迄目出たふなりしを知らなんだか。是からは此鼻次第になつ
た。何事も氣を長ふ持ふものじや。一比は、いかなゑつのはんれい
も忍まじきほどしんきな挨拶で有たが、此夜のの衣は何事じや。こ
ちがまた頼まる、時節に至つた。なにと過宝もの、うれしいか」と
扇で顔をせ、れば、「はて何をいはしやる。また埒もあかぬ事を」
「これ氣づかひ仕やるな。埒はおれが明るほどに、御子の出来たら
名は何とつけふぞ」と打笑て手をとらへて帰りけり。 五之巻終
（10ウ）

卷六（副題…大和源氏）

宇津山小蝶物語第六巻目録

性比の蘇鉄

にくし碁盤のをき所
いはれぬ徳兵衛が忠節
帰るさをし、袖のうつりが

鶴鶴の台

聞度は藤波が御しなん
足をとのするはわるいもの
美男の聞へ物数寄もよし（1才）

赤物 狸々じやくろ
同ひりんずの小袖

襟は右の手裾は左の手
宵からの御初音かたじけなし
かたをかまれておなじ断

問ば答る関が原嘶

冬の日のながきとは
おそかれとかれとぞんじ候
七つは寅の刻御苦労く

千世と謡声

二言といらぬ一口の茶
ゆるりと御座せ志賀の里
丑の刻に阿漕が浦（1ウ）

雨ふりて堅く成道

此ほどは母御の百ヶ日の中なれば、外母が本までも御出はなりがた
し。源七安に不任伊織を我寝間に忍ばせ、姫君に能々いひふくめ、
夜のふくるをまちて前裁の路次より引入をく。御ひめ様此二三年も
打すて居給ふに、此十四五日は薄化生にその外身嗜常ならず。子
の刻ばかりに人音さりしゆへ、そつと縁の下より歧出て伺へば、君
も中の間の唐紙宵よりほそく明をき給へども、御寝間よりは二間あ
りけるに、比は霜月廿一日、うそ曇りても月の夜なれば、身身を縮め
出給ふ。伊織がすがた偽寄にも見給ふ事なければ、まづ白杉戸（2
才）のたて合よりすかし見給へば、ずらりとした中おとこ、脇ざし
倒ざしに仕て蘇鉄の本に立休らふ。「扱もうれしや、すいた格合ぞ」
とそろりと出給へば、中松も酢貝の寄ごとくに互のはづかしさ

一代の皮切、君縁のはしまで出給ひ立ておはしませば、おずくた
ちより手をとつてじつとひけば、伽羅の香の御身をよせて「苦勞に
御ざんしよ」と仰らる、が、是が御言葉に掛り初「君ゆへじやも
の、なんのいの」といひざま、御腰を引よせてじつとしむれば、
「まづあがらんせ」と肩を持ってひき給ふにより、漸々として躰あが
れば、手をとつて寝間の方へ行給ふに、何とかしたりけん、碁盤に
ゆきあたりて碁石ともに(2ウ)ぐはらりくと打こかす。御父
左京之進聞付給ひ、「やれ中戸うて。紛ものが入しぞ」と言声に、
ひめ君は寝間に入有明吹消給へば、科人は庭に下り白槇のもとに蝨
むを、下部の徳兵へ二尺あまりの脇ざしひつ提、拔仕てより只一
打にと切てかゝるを、とびちがへてつと入、袖しほりに取て投
る。「やれ狼藉ものよ」といふ所へ、「心得たり」と源七折合「り
やうじすな」と声掛、伊織をとつて抑へ何の苦もなくひつ縛り、
「それ、小てう様はどなたにぞ。過ぎしますな」と手燭持て立奇、
まことしやかに好清をつくぐと見て、「のふ、扱もく人にくこそ
よれ。貴おはまつ何とした不調法な事ぞ」といへば、左京ふし(3
オ)ぎに覚しめし「何共合点がゆかず。何人ぞ」との給へば、ひめ
君声をかけ「是源七、まつまちや。おれがしんでから必くあし
く仕てたもんな」と守刀ぬき自害せんとし給へば、父へ周章て
「やれ氣違め。誰じゃ。それうごかすな。いかさまは子細あらん」
と言へば、高橋つ、む所なく前後小間声に申あぐれば、「是はいか
な事。扱も浮雲事かな。其繩はやく解け。幸の事、見れば年ごろも
よし。見ぐるしからぬ伎倆じや。むすめさへ氣に入らば宇津山の家
を継せよ。これは目出度次第かな。何事も某に御任し候へ」と、
さて伊織に向ひ「こよひはまつ帰らせ給へ。明後日の夜、めでたく
祝言いたさん」といへば、「左之右之宜頼申ぞ」と伊織は柳原へ
帰りけり。(3ウ)

物いはねども見ゆる発明
明ればそうく外母が方へ呼に人を遣る。折節時なれば家内の
蜘蛛の巣をとり、髪洗月代すればやうく日も暮、その夜は
左京様もしらぐ明るまで御はなし、伊織俗性藤波が事迄しめや
かに申上れば、えつほに入給ふ。東雲の中より藤波をよびに遣る。
本よりおくする気色なく来りて、御りよん様をはじめて外母や内方
衆にも二百年もなじみたるやうになれそめ、諸事味目声に取て廻
り、七所のかねをもらひ御顔をなをし、白むくとり出し引繕ひ、あ
かきうちより御風呂に召させ、相酌の銚子鶴鶴の白、鳴雉子の羽
盛高盛、むすび昆布捲鯛、(4オ)【挿絵】(4ウ)【挿絵】(5オ)
松の緑鶴亀、てうはながたの敷紙、口の間は京に御一門なければ、
万事源七が下知にて路次、縁さき、廊下、中の間にはひしと蠟燭を
てんじ、奥の間は燭台にほんほりを掛て御姫様北の角になをし、藤
波右の膝本により、「何やらちやく」と御しなん申せば、うつむい
て「あいく」と言なり。折く御返事がなければ突声をする。外母
も聞ケ敷中にもちよつくと来て、「かならずくそもじ様を頼ま
す。よふ言きかしまして下さんせ。常々ちやくが剛ふてなりませ
ぬ」と言すて台所へ出れば、近所の衆中御出入の者杯「御目出度御
座ります」といへば、「なふ、さ
つてもわしがうれしさ御推量な
されて下されませ。先お茶まい
れ」といへば、下々の者ども「お
乳様、わし(5ウ)にも少奥の間
すこし見せて下され」と覗く。
「はて、わけもない事。足音のす
るはわるいものじや」といふ所へ
「御出」とほのめかせば、源七

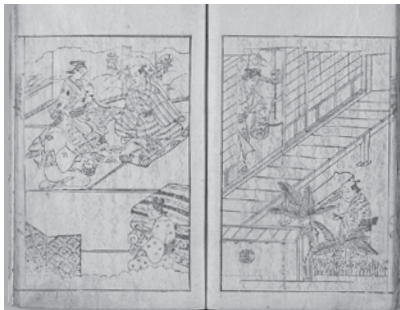


図5 巻六 4ウ・5オ

「心得たり」と上下にて敷台に下り手をつけば、「大儀じや」とひらたふいふて奥に通り、左京の進秀正殿に対面。伊織が其夜の装束には、肌には白きねり絹に中は浅木、さやのすそを見る茶の山みちにくりまどり、所々に萩の玉虫の飛ぶ風情、上は皆黒の紋つきに袴の折目高く着なし、七所金にて家彫の大小に持代の印籠、もとわたりの中着、豊障婢娟に、扇敷腕までも花奢に育たる風俗、何共物をいらず押し直りけり。両方の引出物とりかはし、御盃献くに願れば、左京様世にうれしげにて、常の一間に入給ひ(6才)けり。

千年に一時の花

かりにもせいしはせんなれや、抑此君の御母は大和の国広瀬の郡父の俗性は原田氏母なん藤原にて、おらばおちなん萩の露、ひらはぎえん玉篠の、まだいはけなきころよりも、長橋の御つぼねに十六才迄宮づかへおはししを、其比左京之進関東の奉公に在京の折ふし、見したまだれのかりの縁、一夜かり寝の情よりふかき妹背の中となり、しらぬ東に身を寄せ、其後左京之進牢くの身となり給ひしかど、たゞ一人のひめ君に春の日の長きをも、さうか三伏の夏の日も扇の風をふたりが中にまねきよせ、秋の虫の(6ウ)音の耳にしむもちよちくあは、にうちくらし、冬の夜つめたきにも我を忘れたゞ御いとおしみにまぎれくらし給ひしが、今宵の目出度かりしことぶきに、はや先立給ふこそいと物うけれ。左京様は一人寝の床に姫君の新枕のういしくしかるべきを語り合する友もなく、御心づかひなるこそ世の中の物のあはれしらぬ人の為ならんかし。

しら玉と見えし涙も年ふれば

韓紅にうつろひにけり

夢の浮橋を打渡り、身の心中をあふぐべし。御寝間はげばく敷はなけれど、花畠をしつらふたる六畳敷へ打懸さしながらぼじやノと仕た御姿を、外母(7才)藤波二人して御興かくやうにもてな

して引入、外母舞様の前に畏「もはや御しづまれ」といへば、はかぐ敷挨拶もなく袴かなぐり捨、狸々ほど赤き顔にて行ば、君もいよく恥かしさに石榴のやうなお兒にて片陰におはします。しゅちんと縷子の蒲団敷て「いま一度御盃」といふ。盃台中にをき藤波御酌になをれば、御ひめ様藤波が膝をつき給ふにより、「今度は御前御とり上げなされ、奥様へ」と仕合人の方へ盃遣れば、「いや、まづ今宵のうちなれば、此たびもおれが戴ましよ」といふ。「む、それもさう。最早御一代に今宵計の事は、幾度殿前の御いたゞきなされても、いよく御めでたふござります」といへば、またお姫様より取上給ふ。こつくとして(7ウ)伊織はのまねども酒に酔たるふりして茶を一つ乞、たばこ盆引よせて屏風の絵穴のあくほどながめて居れば、君も文庫の蓋を取上を下へと同じ事仕給ふうちに、藤波耳のそばによりぼちやくいふて口を出れば、外母夜着引風、長き枕北の方へなをし、先へ御姫君様西むきにふさせ夜着二つ羽がひ重ねに着せ、伊織が手を取てつきやれば、「此中は草臥やろ」といひざま、帯仕ながら後へ東向きに俯所へ、すそへまたやりちがへて一つきせ、ほとくとた、くも夢かとおもふうちに、枕な方燈ひつ提南の角へなをし、屏風あき所なく引まはし、わざとばたくと立出仕切の唐紙はたとさし、声高に藤波と取合ぬ芝居ばなし仕て台所の家具どもも取置、半時ほど過(8才)てからやがて西むきにかえりそつと手をやれば、一重帯仕てきの字形に釘のごとくに成てわちくと揮て御座。引よすれどもいつかな事、

「これはまた何とした事ぞ」とてしがみ付てかこてども、いよく堅丸て物もいはずして襟も裾も縫付たる様なり。互の胸の煙に襖の中もゆるばかりに、六月にも覚えぬ汗したがり、あまり熱さに夜衣二つ履脱、時分がらなれば間もなく寒くなるを、人の仕た事のやうに「さむきにせめて身を寄給へ」といへば、殊外にふるふ声にて「今宵は免して下さんせ」とあるが宵からの初音、まことに優曇花

の蒼出るかとおもふほどに有がたふはあり。「其ことはりが入る事か、御心まかせに仕給へ」「さりながらさむふてならぬわいの」「へや、こなさん（8ウ）のぬいでおいてから」とうへなる夜着をひき着せんと仕給ふ所を、十一のずんどをひたとだかへてメよする。のれどかきつけかみつけど離さず。こちやきつふ嚙程にそれが辱かたじけなくといふ。肩のほどよほど忍悪き程かまれてもはなさず。屢すれば透間より錐のごとく寒るにより、せんかたなく「そんならまづはなさんせ。風がなびごととおもふて」と物をよいに仕てゆるめ、二人して夜着どもそこへ引よせ遅々と物語して、漸々所々半分ほど本の子になれ共下紐解給はず。手を廻せども掌知らず。また手をやればひつかみみて本直に成がたし。とやかくすれば、門は大根うり豆腐といふ。有明もしろくなれば雀鳥もつねの朝起、あそこや爰の井戸車の音、いげちなくもさみせられし（9オ）と枕持あげ、「晩に逢ましよぞや」と首筋に手をかけていへば、「あい」と仰られしが耳の底の宝もの。

御樽肴饅頭

楊枝くはへて出れば、源七それこれといひ付て手水つかはせ、たばこ盆持より関が原ばなし。左京殿も折々あと打給へば、ういぐ敷中にも寸計ぐに気を付れば言葉にくずもなかりけり。程へてうば藤波御寝間に行、「これ、ぬくぬくの奥様、御起なれ」と引起し、御化生髪削りなどするにもこれの事をいへば、「毛がない」など、宣を打わらひ、火綾子の小袖召させ、御膳の御見舞衆のと取さはぐ中に廿四日も暮れて、何が前二三日まじろみ少く御座せば、（9ウ）【挿絵】（10オ）初夜の比より左京様も御寝所に御入、藤波の通



図6 卷六 10オ

り者が「これお姫様、こちは早ふ寝ます」と源七が吞たばこをひつこすれば、「いや爰な狐め」とにらめば「ゑ、しさいらしい」とふみこかし、「今夜寂いはおうばどのひとりじや」といひ捨格子の間へ行ば、源も苦笑して跡から行も可咲。うばくつくく笑ひながら「さあく、も、御しづまれ。ほんにこちの人今日は去なすまい物を」といへば、小てう様もつやくとおしさふに笑はせ給ひ、「さあ来てたもや」「い、ゑ、最早お床はとつておきました」といふにより、好清ゆきて起もせず寝もせて替棚なる本ども引出し見て、しばしすれば君も御入あり。唐紙さしてた、ずみ給ひ、何とも言葉もなく片わきに（10ウ）居給ふが、少してから「も、御しなりませぬか」「あ、こなたから俯給へ」といへども何ともなく御座により、「いざ」とて蒲団にあがれば、夜着引着せんと仕給ふ所を引よせてじつとしむれば、「またわるい事を」「何のわるい事ぞ」と膝に引のせ、「扱もけふの日の永さは」といへば、「わしも恥敷てわるふござんした」「さ、まづ寝さしやんせ」と夜の物引立つきのけ給ふにより、帯とけば引きせ給ひ、「扱おぬし様は帯仕ながら」そばなる夜着の下へ入給ふを、其ぶんにして少の間心をしづめ、うちノと手をやり、すりより引よせ、ほどけどもあららかにもなし。透間もなく我懐に引入、雪のはだへ未莊氣にしてち、もたるまづ、さながら中肉な若衆のごとし。されども下紐とき（11オ）給はず、「ま、よ、遅かれ遅かれ」と越方のこがれしうさを語り、燈にうつるらうたげたたるやんごとなき御かほはせ、折々可咲さふな事などいへば、あざやかな御口もとにこくとあそばす時の忝さ、背中のほどしづかに撫て語り慰うち、段々の訴詔申せば、じりりと下紐打とけて、魂の緒の絶なばたゆるほどのおもひ、ゑしやくもなふ互の尻をよれまつはせて申かくれば、御覚悟ありてか、小夜も漸寅の刻ばかりに、よほど御苦勞なされ、ほのくくと明にけり。

而後に又持て参り候

三日目は先様こゝろ安き人々ばかり残らす。夕暮の御振舞、伊織獻立書給へば姫君料紙硯とりまはし（11ウ）給ふも、鈍たるやうにもあでやかにもなし。客衆の御機嫌すぐれ、「千世ませ」と謡ふ声より、「忝」と御立も夜半時分なれば、寝間に行て待ばおもひ人様も続て茶を一つ持て来り給ひ指出し給ふ。「一口まいりてから」といへば二言もいらす吞さして、下さるゝ手を取て「ねよか」といへば黙頭給ふふりあひのしほらしさ、金輪際身節はなるゝやうにて少酒気はあり。ばたくと言も心やすくしかりまはして有明のふときもかまはず、ふとんのうへにて枕絵など取ちらし、こそばさうな所へ吸つきてたゝかる、辱。されども昨晚の皮切に難所を越給ふゆへに、申て見ても御聞入なし。御機嫌ぞんぜば「てきと御肌衣まとはせ給はん（12オ）はひつぢやうぞ」と、「それなら御無心は申まひほどに」とあまるほど誓文を立て、さつぱりと下ひも取のけ、命がけの心中をあかし合ほど、いづくへ手をやりてもさして御吟味もなく、おもひのまゝにメまどひ、日本より大節におもほゆる肋を、しかもおもはれてあぜかへす時節になりしは、いづれの神の御恩ぞやと、二人ともに上り詰たる上気嵐す事もせで、たがいに愛らしく語る事ばかりにて夢もむすばず、しやうめつゝの鐘も鳴り、八声の鳥もつげわたりてしらゝとあかしけり。廿六日は左京様前かたより御契約にて、そうゝより江州志賀の里八景に雪のふりし風景御らんせんために二三日御下り、うばもわが宿へ（12ウ）帰れば見る目もしげからず。御膳の刻にも遣り目片ほに鑑が入、奥の間のやり戸のたて合なんどにて手をとりにメあひはなしもやらで、「晩にはいやでもをふでもじや。くそ、ならぬ」「ゑ、しんきな人じや」と顔とがらかせば、「それでもいやな物じやもの」「後にははじめのやうにはない物じやげな。ちつとなりと、や、や」といへば、まづ後の事とのたまふをたのみに日をくらし、小早ふ寝て待ば

間もなく御入来にてこそゝと御入り、水も潜らぬばかりにしめてしばししてから、「さあ屋からいふた通少はいふ事も聞給へ」と申せば、「そつとゑ」「む、」と心しづかにとけしなけれど、御機嫌にさはらぬやうになしきずしにあしらへば、少の事は御了簡（13オ）なされ只覚束なさふなり。五日目の風流さ外の事はなしに、「夜前はきつふわるかつたかゑ」「あい。いやじやあつたけれど忍へて居ました」「能こそ晩にはまたよかろ」「ゑ、晩にはなんほでもならぬ」「それでも此鼻がきかぬ」などせりあふて、坂が手引合てのほりりよか、つれて御床入。こたつよりすぐの足なれば、打かけてもあたゝかなり。ゆふべより心持たしかにて、こなたにもたんなふの手際をなして、それよりなをゝしはつけなく申ゝて、丑の刻過に御じひ心が出来てから、互にうつらゝと、明る日の四つ前に目をさましけり。

六之巻終（13ウ）

卷七（副題：旅枕）

宇津山小蝶物語第七巻目録

古筆ならねど虫干の文
 相談之日日記
 悟気の神も有照覽

むかしをとにもいふ白地

金性水は大吉也

え見へぬやうに成申候
 御物数寄の曲
 好色の別殿はすがた絵（1オ）

ひとり見の常棧

さる程に、日数たつほど床敷顔にて、昼も人めさへなければじやらくと、少の間はなれ給ふも待遠より情をつかし給ふ。諸共に二世まで契る情ぶり、君より外に知る人もなし。比翼の鳥も塵をひねり、連理の枝も「あの手は知らなんだ」といふほどの御中、おもしろさの日日記付るも人はしらず、何に付てもあくべはなふて、世界の口さへ思はずは、帯とおびとをつなぎ合して「せつなもはなれまひに」と覚しめすも理なり。両方ともに出家の心ざしも大体の者氣にいらす、ふかき恋知りが二十二と拾四とのどちらも稚なじみ、観世音のさいらいあそばして心を引給ふとても、余所に心のあらばこそ（1ウ）此世の事はさてをきて、二世三世の堅目とて刺水の神迄書載、もろくの仙をおどろかして祈請はとりかはす。伎倆は申に及ばず、手跡和歌管弦にも人に矯て器用なり。元より馴身ほど、氏すじやうは針口に乗てた、く共高下はあらじ。只たがい年のふくる事計なごりをしきはなし。後世のため諸共に生れ逢給はんねがひよりは外なし。是を見きく物、いかなる聖賢の二道を誣く人も、君子小人に限らず羨まぬはなし。とかく現世の仕合をみて過去未来を慮には過じ。さはあれど、川流の姥が存念誰が聞しぞ。朝夕望絶る人なし。その年も暮、あら玉の春の寿とて、

海山の模様ぞ神のきそはじめ 三葎（2オ）

三人連て例のとり追 蝶女

梅が香に路次の板戸や覗くらん 高橋

衣更着いつの間にかはをくれ、弥生のはじめは桜がり。北へさす花の枝折れ、「乙娘」と書てむすび付るが青葉まじりに残るを見ては、郭公のはつ音も二人が中に聞いて通し、短夜にもかたらでぬる夕部もなく、越路より渡る鳥に心をよすれば、おのづから鼠尾草の花に哀を催しなげらも、永き夜は独寝のむかしをおもひ出て妹背の楽とし、野の草の枯るをも凡毎年の事と思ひ、水上の鴛鴦に執着のう

は塗してもらひ、「白雨のせぬ夏はあれど手をしめぬ日もなし。踊おどらぬ舞台子はあれど口吸ぬ宵も（2ウ）なく、無間地獄に樂はあれど君をいとしく思はぬ隙はなし」と黒み黒目ども、薄らがぬ中にも垣といふ字は捨られず。能過たうへの仕事がなさに、或時ひめ君宣ふは「ごなさんの若衆のときの念者様に可愛がられさんした時分の事、皆咄してきかさしやんせ」「はて、わけもない事」「いや、どうでも聞たい。きかねばならぬ」「そんなら、君も一生の事皆いはせ給ふか」「む、わしいはふほどに、まづ語らんせ」伊織心におもふやう、「いかにも序に我あらしを咄し、いひ号の方の思ひ入聞べし」と思ひ、「それならば、おれがかたからあかさ」と互のざんげぞ風流。「まづ浅山弁左は万事器用な人でありしにより諸事を習ひに行しが、いつのほどからやら髪結てくれて、しかも（3オ）【挿絵】（3ウ）どこぞへ連て行ては友達衆に『おれが若衆じゃ』などいはれた。道のしるき所などだきてありき、諸事の指南に付ても念比にしてくれられしがうれしさに、おれも男はよし」としかつた。さて慥に念者若衆に成てから若衆一通りの事をしへられて、その可愛がられた事は今におもひ出さぬ日もない。此ほどこそ、そなた様に心ひかれて折く忘る、事もおほし。いとしや、親御達が『女房をもたしよ』とあれば、実からおれがまへきどくがられた。又底からいやさふにありしも、おれにおもひが深かつたゆへじや。死なれし時のかなしさ、人が若衆といふも腹が立た。いか様我等も其方ゆへに少し心中がくだった。『おれがをとなし（4オ）成たら、若衆も女房もぬしが見立て持たしよ』といはれし時に、はづかしふはあり『わしはそんな事はせぬ』といへば『末で見え』といはれしが、今迄居られたら能たよりであるか』といへ



図7 巻七 3ウ

ば、君聞召「齋く抱かれて寝さしやんしたか」「それは一日逢はねばなつかしかつた。その時分から人の肌にはつた事はなかりしが、いまはそもじ様を介抱するやうになりし」といふ。「誠にさふであらふぞ。其後も女郎があるぞ」「またひよんな事。此うへは何の事もない事は有まい」「さればそれも有ほどに、まづ貴様のを聞てから皆咄そほどに、かた様もざんげし給へ」「わしはなんの事もござんせなんだ。九つの年、と様のはなさしやん(4ウ)す人の嫁にやろといはんで、まことかとおもふていやした。その息子が使などに来れば、皆「あれがわしが男じや」といひました。はづかしかつたけれど二度見ました。其後、わきから妻が入ましたげな。いか様他人の事のやうにはないものでござんす。それから『浮世ほど水くさき物はない』とおもふて尼になる気でござんした。此外にはか、様の改名をかけて何事もござんせん。さあ、今の残りき「伊織も聞間胸こちるほど腹がたつたれども、さあらん兒にて「別の事もなかつたが、おさなき時分寺へ行し時節、師匠の娘が一人ありしがおれに一つ若かつたが、其子と少心が有しが、是もおさなき時の事なればさして何事もなかつた」「そしてどふでござんした。(5オ) 能子でござんしたか。皆いはんせ」と冤給ふ。「いや、別にいふ事もない。子もさのみ美人でもなかりしが、只かしこいつまはづれのけだかい生れつきであつた。手習仕てたがいに机にてあそび居しが、『巻様いとし』と書て越給ふた。はづかしさにおつとせで居た。其後に又わしに『夫婦となりますまひか』といはれた。其時『成人したら』などいふて、それからはいかふ念比にせられた。互に文をとりやりなどあどない事であつた。一度昼二階で寝たけれど、今おもへばふ埒な事。其後弁左死去の折ふし、なんとなしに悔の状こされたれど、かなしさのあまりに返事もせなんだが、聞ば大分の仕合にて最早子が三人あるよし、定て今におれが事折く思ひ

出たりやうが。何様世(5ウ)の中もおもふやうにはならぬ物じや」といへば、君気色替らせ給ひ「本にこなさんもおもふ俣ならそのかたとそひ給はんに、おれがやうな者に添給ふか。撫やうるさかろ」「あふ、そ様も宜あるいひ号の男がほいなるか。『手前が様な貧人を取あげて男にして何のかとし給ふも、本に情のみちとはいひながらおもへばおれも不気味な事じや』と常に思ふ事じや」といふ。「是は聞所かな。常くそのごとくにつらい心を持給ふが道理こそ、かの娘の事計おもふて居給ふによりてなり。こちは何心もなふいとしぶ思ふに、そのやうな水くさい根性と知らなんだ」とさめくと泣給へば、「誰が水くさいやら知らぬ。おれもそ様のはなしが一つも嬉しふはなれども、そのふりは出さぬ。いはれぬ事(6オ)を聞たがりて無利なねだれやうばかり。外の男のやうに手かけ足あけを大ぶん持者さへあり。おれは今のがありたけじや。無利をいはしてきく男ではおらないぞ」「無理を誰がひます。手かけ足かけを持やうな男めなら、三年四年のおもひ定た道心をとまらりよか。それでそのやうな男ではないは」「扱それはさうなれども、さきのやうにどうよくな事をいはんすは」と宣ふ所へ客来して、せりふやみにけり。

鼠になりて是が聞たし

何ほど清き手にも雪をにぎれば其色うるまずといふ事なし。から紅も墨に染ては其いろくろし。それより水に油のまじりたるやうに成て、寝間へ行(6ウ)てもたがいに物もいはずに独ねいりして、「こちらからは手をさげまいぞ」と我を立かりてぬきさしもならぬやうに成て、うづみ火の胸に新聞をすへしこそもどかしけれ。女はいとゞ気のせばきに、男も下心よはくして内もすみたるやうにてくらしかね、日毎に心にもそまぬ遊山に出て内を忘れず、「いつそ此わざくれに、遊女野郎君傾城に心見すべきか」と思へ共、

せつかく立たる願の朽ん事をおしみ、誓文の罰も醜しく、独り事いふてうつかりと辻にたつ事多し。女はまた男の外へ出るは常さへ下に心のなきに、そゞろにしつとのちすじほそる間もなく、さあればとていさかひ事ほど成わざもせねば、うはべうつくしきにより人もしらねば（7オ）中なをりの時節もなし。いらぬ咄しが深入して、甘草男をそばにおきて袋へ入しやうに齒がゆし。内へ歸りてもいつものやうにそのまゝ、メ逢事はさておき、ろくに物もいはずたがいに「心づよい事じや」と思ふて暮すかなしき、「いつそじがいて悔まじよか。君に命はおしからね」と泣せんもかはゆし。「作病をおこそか。それもたはけでなければ跡がはづかし、」とおもへばきのどくしん気になり、両方折／＼昼寝することおほければいとゞ夜が寝にくふて、あくびまじりにねがへる音を息をかすめて聞も物うし。伊織もわるいくせが有て、誰なりとも相手にして四つ夜半まではなし。朝寝が数寄じやに、蚤にくわれてうち／＼とかくも皆々聞て居る人あり。（7ウ）御内室様もする／＼とはなし寝入がすぎなれど、これも俄にとまり給ふ。しんほう両方ともに「我れほどな者はない」とおもふからなり。此たびさへ、首尾が能なつたらすゑ／＼に「若も此やうにふり合た」とこちらからおもしろおかしく仕掛て機嫌をとろけれど、「今度のやうなねちもこちもならぬやうに仕なした事はない」とたがいにおもふより先、此たび手をさげぬが文盲な事なり。一日／＼とくらして廿三日が間、あつたら月日にしかも牡丹と蘭とのみだれ逢とを、雲間の鳳も羽を留てそねむほどの契なるに、無人城かや、ためいきの耳にしむ小夜の枕も蚊屋釣ころ、扇を兎のせて臥すきうくつき、君もむねをすへて、そつと左の足をのせちやつと引給ふ。伊織うれしき大分（8オ）なれどもじつとだまれば、また足にて引よせ／＼後はあらけなくより給ひ、肌着へだて、しつかと乗か、り給ふをつきのくれどしがみつ。又おしやればのかんとし給ふを下からじつとめて閉れば、しく／＼と泣給ふに

よりいとしきに言なくて、「何事もおれがあやまつた、こらへ給へ」といへば、「わしが事も免して下さんせ」と仰ありければ、いつの間にやら犬が喰て、いそがしさうに身にまつふものふみぬぐより、「何がさてひさしぶり、また新敷やうな心持。色／＼のかこち草もその心が替らねばにくげもなし」「今からゑぐりわるい事いはいやんしたら聞ぬほどに、そもじ様もいぶりな顔し給ふたら打ころすぞ」「ころさんせ。ころされたら本望でござる」「のふ、それはおれがえころさぬを（8ウ）知りて殺せとはき出すは」など、また打よりて、うつ、が夢の世の中に何をへだてん人心、うれしはづかしおもしろし、いとしかあひしねやのうち、昼の人の関守は屏風に書しふろくじ、君と我とがさ、め言、もろこし人のすがた絵までうつして契らぬ曲もなし。「外郎く、んでくださんしたら、髪すいてしんじやんしよ」「足さすらして下さるなら、氷砂糖かみ碎ひてやろ」と、姿の皆見ゆる鏡両方にたて置て、はだせ馬にてあばれる思ひ、くかららぬ夕間暮までまつまでもなく、たがいかみから御目足まで撫さすり、わけもなき所を味はひさんなきなりふり、残所なくじろ／＼と見て遣ひ給ふ身ぶり、鏡にうつるふかき情、命をむしりあふ事これ（9オ）なんめりといふ事しかなり。

うばたまの夢に何かはなぐさまん

うつ、にだにもあかぬこ、ろを

さくら咲遠山鳥のしだり尾の

なが／＼し日もあかぬ色かな

わたづ海の浜の真砂をかぞへつ、

君がちとせのありかずにせん

うき草のうへはしげれるふちなれや

ふかきこ、ろを知る人のなき

智者の未来記

さなきだに、滾る瀨に落葉流すにことならず、篋の糸と年月のいづくもおなじ事ながら、姫君も年(9ウ) たけて十六才もまた盛何のふそくもあらねども過し世の母君をおもひ出せばなつかしく、それさへあるに、父うへの此御わかれより、人目には見え給はねども諸事御心ぼそげにて気情すくなくなり給ひ、また姫君の御祝言とて御悦にどつかりとつる切弓のごとくに、老の波かぜ防ぎかね勞はりつかせ給ひしが、ひきもかへさぬ四手の旅、五十七才夢の春、ちりゆく花こそかなしけれ。姫君泪と諸共に、「はかなきは穢土のならひ。母うへの大三年も此暮なるに、取かさねにし物おもひ。無常の節季いまるか」と御ふうふ諸とも声をあげ、なげかせ給ふぞ理りなり。されども日数に取かさね、今ははや十九才、たゞならぬ身となり給ひ、御産の月にひもとけて御子とりあげ(10才)見給へば、玉をのべたるごとくなる若君にておはします。右京之介と名を付て寵愛奉る。父母の御いとをしみ浅からず、幾良の人が立帰り、此稚子の御器量を讀て通らぬ人もなし。月日の立も、此君の成長を祈る心に我年の寄を知らぬぞ世のならひ。子をおもふ道に限りしれ、へがたく見ゆる世の中にも「いかにもして、此若をいにしへの家引立る位勢にもとづかせん」とおもひ立、「先閑東にくだり、類族の力を頼まん」と、折節金商人の手代志人幸の道連ありて、下部一人召つれて冬の半のけしきだつ、世事の旅こそいぶかしけれ。

東海道
錦や綾に八重つ、む、名も九重の雲の空、月の都を跡(10ウ)にし
て、飛鳥の古巢を立ごとく、見しにもあらぬ東路を、覚束なくも頼
行、心ひとつぞ佐しけれ。流石ゆふ部の暁まで、清くも愛宕の水は
なれ、打帰り見れば久堅の光りも遠く、日の岡の一村竹の目もあや

に、行や渡し船、三井釣鐘音はなけれども、磯打波に心そふ、遠山の松筆すて山、遙に両宮のかたふし拝み、弓手の川風今ははや我身に受て遠方のぞみ、かくだにはあらね共同行切の道の辺に、龜山の賤のふせ芝も隔て我を見送るや、「和泉きとてかいづみ川、から尻馬を追分か、桑名のわたし夢とのみ、いつか帰らん波枕、さすらへの身にあらねども、羨敷も帰る波かな」と古人のこの葉身に染て、熱田の宮井八劍の、神は正直のかうべにやどり給ふ(11才)

【挿絵】(11ウ) 【挿絵】(12才) とかや、実や態にもまふでぬべきに、道いそぐ菅笠のひもひら、きて、ぬまのうつみはあれとかや、鳴海を過て御手洗の池に誰かは水鏡、衣紋はづかし草鞋に足の病てたちどまり、やはぎの長者の屋敷のあと、小田の水鳥住なれて、岡崎の橋も心せよ、春ならば桜咲、遠やま鳥のしだり尾の、ながくし日を行べきに、今をはじめて知るみちは、土の色さへ稀にして、吉田と聞て行暮て、一夜は爰に赤坂の、よどのにつらき木枕も、常ならぬ身と袖敷て、また東雲に立行ば、あやしや森のほのぐらく、狐のともしおもなやれ、横雲晴てふた川や、二心なき契りにも、石牧山はものかはと、しらす白く塩見坂、途海の船のかち浮て、湊くや(12ウ) 跡先に、さ、ら波には笹船に、蜘蛛がま、の一嵐、あらいの関も君が代の、すぐ成人はすぐに行、浜松の宿は是ぞ此、見つけ袋井うち過て、佐夜の中山いとしく、命なりけり

姫小松、漸々ゆけば今ははや、駿州遠江の境なる、名にのみ聞し大井川、たび人の気をひやすかや、水の面のじゃけんなる、人取川と知るからに、只たのめども頼

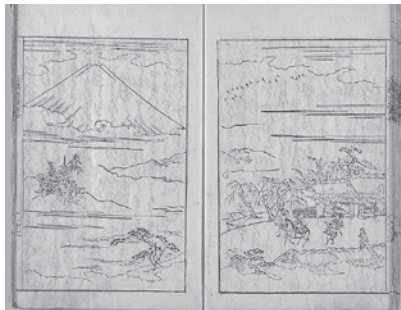


図8 巻七 11ウ・12才

なや、むくつけ男の川渡し、馬ものいはずうたてやな、偏にすぐ世の運次第、嶋田と聞ど宿の女の、髪のままも藤枝か、位はいかに多ぼし山、草臥足にまりこ川、渡れば細砂の濁水、股引の雲曲もなや、世話にいふく可愛子に旅せよと、いづれの人がうそつきで、うつの山辺の九折、青竹の杖つくくと、上れば下るいな船の、いなにはあらぬ薦かづら、心ぼそさよ(13才)村時雨、はてしな小笹原、かちよりぞ行袖ひちて、武士の道はしらねども、府中の名城打ながめ、嘸とばかりに暮急ぐ、三穂の松原風ふきて、海に陰さす清見寺、沖津の波も寝て聞ば、是あんようのさまうつか、さんぶと寄てはどつと引、どうと打てばさらくと、引かと思ればずつかとよせ、岸の岩ほにもみつけて、とうくとぎつくと打さけて、白玉煙のけうとくも、さながら水のちからこぶ、由井のあま人はび取、馬手の荒海まんくと、名もおそろしや爰こそは、親しらず子知らずの、あら磯波の岩角を、さつた峠の切通し、道中の悪所にて、さんぞくの多きあぶれ山、神原の宿へ来て見れば、山くの高根や峯をうち越て、三日ながめてけふといふ、けふは(13才)すそ野の木枯も、聞しに増る富士の山、三国一の誉れある、なじかはならひの有べきぞ。先嶺は高くとして、誠につくりたてたることくにて、高き事ががりなし。雪の深笠うちかつき、雲よりうへの数千間、青苔紅葉の気色、うつくしき事こつずぬに余念なく、さながら見る目もうろたへたり。腰半まで雪を着ながし、くまどるとも彩色とも犯舌につくされず、肩より裾の引すては、まはらば廻れまはるとも、その骨から糸をためたるにひとし。馬も駕籠もかたぶきて、いかなる心なき賤のおのこも身をねぢて詠ゆく、吉原や原を越ればぬますの宿、三嶋どまりに見帰りて、箱根の山に分のほり、薄おひ立あいだより、なを見る富士のけだ(14才)かさよ、すそ野、ねかたいくばくか、「頼朝卿の牧狩もさこそ」とのみおもほゆる。峠の水海さつくと、しろ水坂二子山、小田原に下りて又見

れば、いかめしげなるあしだかの、山はいづれの陰にある、富士そのま、爰にあり。是名山のきどくかや、美人山とはおろかなり。大磯小いそそが海や、嶋たつ沢のゆふ千鳥、塩屋のけぶり捨小ぶね、藤沢の鷹に物とはん、草葉は枯て青麦は、冬の二葉の冬ごもり、鎌倉山はあれかとよ、あづまの人の心こそ世におそろしく、聞馴し人の名たてそつなみ橋、先しばしとて品川に、たどりつくこそあやしけれ。

七之巻終(14ウ)

卷八(副題(早)・枯野の月)

宇津山小蝶物語第八卷目錄

撰津は月の入所

きぬぐのゆふ部
鳥辺野々煙物うし
けなげ成は忘がたみ

入替る二字

茨木の里の草の露
油のつかぬ水色の絹
梅檀のけぶり今ぞかし

梅の切株

東山の谷水鶯の籠ごぞ
でつかりとなをる本の座
白髪たる鬢髭(1才)

己しらすの薄なまり
斯て、伊織祐好清ははるぐの道すがら、遠き雲井のあなたなる

あづまとかやにいたり、先左京之進のゆかり芝の四国町辺に着給へば、「何がさて他事なき中の頼母敷さ、心安く覚しめせ。此子拾才に及び給はゞ、由緒を訴へ美々敷世に出さん」とさまぐの翫しに日を送り、扱また三よしの一門には、四谷といふ所に歴々の奉公人あり。その外そこ爰に浅からぬ方にて逗留し、めぐろ、あたご、浅草、よしはら、角田川、上野のこらず見物して、菟やかくすれば、明る年の二月はじめには、漸く越路の馬もむらつて帰り、残雪もきへて帰京におもむき、扱上方の静なる所にしかもひそかにぞだちたる風俗(1ウ)にて、物さはがしき人込に心うたてて、ふたくと立てその日はとつかといふ宿に留り、遊行上人の寺を一見して休居る所へ、これも江戸よりの旅姿にて十四五なる若衆、供人二人つれて来りしを、跡になり先になりて能くみれば、此ほど在江戸の時分、亀井戸の天神へ参詣せしときに、中門の矢大臣の像を詠め居たる所へ立寄、扇に持てし手をしめぬれば、にっと笑ふていられし時に、あまり可愛らしさに両国ばしまで目を付し小人なり。かた様もほの覚えありけるか、又しても見合せ給ふにより平塚までの間の宿にやすらひ、「御前は江戸相府の天神辺に御まいりなされしとき見ましたやうに御座候」といへば、「誠に随身のまへにてわるい事なされた御方(2オ)にて御座候か」との目もと、何様情のほどはしらねども、打つけにほげやかな子なるにより、伊織も女色はふかき奥をしり、男色は我少年の折ふし忠栄にかぎりなくかあひがられ、懸し情の片便ぎばかりにてその席に座せずうつり、ゆかしくなりて道すがら語り合すれば、此少人はさる西国大名の大坂御屋敷あづかりの子息にて、江戸へはじめて私用に下りて帰りなり。中松も先祖まであかしあひて、其暮より宿も一所に留りぬれ共くどくにはかもゆかで、三とまりは知行寺の杜若を見るやうにて過せしが、掛川といふ所に留り水風呂に入給ふ跡にて見れば、江戸にある小菊といふ鼻紙のあい木地に紋すへたるつげの櫛

あり。やがてそつと取てかくし(2ウ)ければ、風呂よりあがりふしぎさふに尋ね給ふによりて、「御櫛にて候はゞ此方に御ざ候」といへば、「又てんがう計こなたへ」とある。「いや、あまりにくさに取置ました。御ぐしは我等が撫て進じ申さん」といへば色々と難儀がり給ふをなだめ、後へまはり前になをり、「誠に此程心を尽し申事、ぜひとも叶はざる事ならば、私はこなた様故に死すすほどに、今宵限りにうけ給りました」といへば、「我等のやうな者に何のこな様の実に見しめそ。たゞし道中の御慰か。京の本の御若衆のかたへ聞へたらこはや。上りて縁があらば、わしをなぶらしやんした事をみなく申ますぞや」といひ捨立んとし給ふをたもとにすがり、「扱も浅々敷事を仰下さる。某は氏神かけて弟ぶんは御座らぬ。惣じて若衆のみちは知りませねども、いか(3オ)なる縁にか、貴もじの御器量にとんとほれまして申す。さりながら、思召候念者様の御座候は、扱なく御座候へども、余りにつれなき御しんもじにて候」といへば、「御はづかしう御ざりますれども、わしも前髪役の事なれば一兩度も人様の御申下されし事も御ざんしたけれど、真実をはかり今迄何のよすがもなくくりました。御心体偽りなくば、いつまでもかはりますまひ」「さてもかたじけない。是は大体の縁にてあるまい。かならず、日本より大節におもひますぞや」と打とけてその夜はしらくとはなし、情のふかき事、「阿波の鳴戸に沈むとも御心にはそむきますまい」との深き文取かはし、「いとしらしさ何ゆへに女道計に年月を送りし事ぞ。これほどにふかき事なればこそ、今といふいま念者に(3ウ)【挿絵】(4オ)なりて知れた。九十九までも此道はやめまい」と、それより留りくくのおほき。昼の中も池の坊の伝受づくめを床に



図9 卷八 4オ

もとめたるやうにて、「あはれ長崎まで陸をとをりたし」と、その心から少やすみたる所もはてず、朝の立やうの遅さ、時となく御顔を見とれて居れば、片わきにては御手指のべ、うつくしいものをおらふやうに持遊びたまふ情、「さて、何ゆへにそれほど可愛とおもひ給ふ」といへば、「おれを忝ささふにさしやんすがいとしいによりて」との御意なり。「時によりてはふつとりとかぶりつきたい事多し。いつ過るともなけれど、江州石部にとまり、明日は直に京へ御入あり。我等の宅に御一宿ありて、明後夜船に伏見までは送り申さん」とて、まづ道中の寝泊なればいよく（4ウ）なつかしくて、夜とも腰のつがひをもみ、足の指を引ひねり、とちつゝ可愛がれば、背中をかきかたを打、腹をさすりていとしがり給ふ。此ほど毎夜かみしだしたるたぶさなれば中を押分て切て取、京につけば奥様のはしりで給ひ、先顔を見合し嬉し泣もこつずいにめいじてなつかし。その夜は道中の御連まじりに、ふた／＼と江戸の首尾道すがらのふうぞく咄明れば、大坂の客翫七つ時分より御いとま乞。殊の外懇意に見ゆるもうさんなものなれどそのぶんに見のがし、常の臥戸にうつり「ゆふべはいかふ草臥さしやんしたにより、わしも久しぶりて一對で残り多くてそのまゝ、寝入らしやつたによつて、それからどこもかしこもみてはさすり／＼して、後にな上へあがつて（5オ）いたが、たはいもなふねやんした」なるほど、おれもねむたさうへにも覚へて居た。色／＼の事めさつたが、かたじけなさどふもいはれなんだ。能忝かるぞ」「にくや少もうごきもなされなんだ。今夜こそ朝までねさしはせんぞ」「またやくだいもない。まだ草臥もやまぬに。さあ一卷誦ましょ」「又其俣御寝なるならいや」「かしこまりました。いか様とも御意はもれまい」と、いただく味ひつはり色になればたがい問ふて休み、「一そ此様に仕て居る所を、一おもひにふたりながらずつと死にたし」と、あくまではたらき合せてじやら／＼と語りなぐさむ中に、申さぬ

てこそ道中は大坂の菊之介につゞけまじほられ、又京の水にすゝぐ事なればすや／＼寝入ば、奥様は少の間に目があきて、牛みつごろより股（5ウ）のつけねひざの節、指さきかたひぢままでさすり下さる。態息をかすめしらぬ体にて居れば、しばらくしてから引のばして打またげ給へば、つぼみ茸のやうになりて有をつきたをし、「おのづからもたげねよかし」とおぼしめせども、いさ、かのちかひなるを御手づから仰付られて、七つ八つほどはこび給へどもなを知らぬふりして居れば、「え、にくや」とわきつぼをせ、られ、じつとつかまへて御氣に入やうにいたし、又をきなをりてひざにあがらせ、しばしすればまたたがひに抱起されて、柳にまどへる藤を風の吹ぬにゆら／＼と背中をなでかたをさすられ、木ずゑの露のかはくまもなく、裾もいつのほどにやらふようとまでしこの根がしがらみて、土の（6オ）あた、かなる味をいそぐとはあらねども、顔を見合に只も居ねば、おもしろき中に窓障子に夜の明るをつくるほど迄非番のなき夫婦のたのしみなれども、菊之介が事一日／＼と恋しくなり、折節に文はとりかはせども心にまかせず、「何とぞ今一度逢たら一日ほどしがみつゝて居よ物」とおもふおりふし、其年の四月に江州石山寺の開帳にて、豊田菊之助も幸下心になつかしき限りなく、前かたより申越参詣の刻あひ申べきよし、衆道の大明神の御誓とよろこび、三条のけあげに座敷を借り待請、何がなしに盃仕て「なふ、うれしや。逢たふてならなんだに忝なひ」と引よせて吸つけば、「何をいはしやるやら。おれが方から物参りにことよせて（6ウ）登りたればこそ。こなたのやうな念者を持つた不仕合じや」「そのやうにいへば是非がないが、何ほどが居て居たとおもやる。しかれども分別が俣にならねば、さて久しぶりじやに、いざまづ」と木枕あてがひて、七つまへから初夜までに二ふしの床。「これほどのふかき情、何とぞして京中見物に二三日逗留し給へ」と申せば、「わしもさこそ思ひますれ共、此たびはな

りませぬ。能折ふしじやに、たがいに書物せん」と、「一生若衆念者の二心なすまひと」諸神を書のせ、絵どりたるさうしを見るほどあかき物をにじりつけ、たち別る、名残のあひらしさ、「さらばや、今少見送らしやんせ」「何ほど成とまいるけれど、いよくいぢらしい」「それもさうじや」「も、いなんせ。先あそこまで」と見帰り見とゞまり、別れて(7才)もはやかんにいよくなりがたく一両月をくり、幸大仏長刀町に極くの隠遁者にもあらず、又うき世数寄にもなき順庵といふなま法師をいざなひ、難波一見のためと披露し、小蝶御前もいざ供して、上下七八人ぎはくと発足して、巨洲の森を跡に見なして桃の山を左にそなへ、焼野、きづすかつこ鳥、たれ松虫の露ふかき、鶉がま、の深草の里、芦間を伝ふ小船をかりて、水もねむれる淀の橋、葛葉の片山まばら成、つたへ聞志野崎入道が法心も恋に朽たるあづさ弓、納る御代のおとこ山、馬手ながらの川船の、帆かけて白く草にたつ、賤の小笠も愛らしく、しめ野も過て堀江の橋の辺にするべありて宿とむすび、明れば和泉の堺、住よしの松も(7才)岸うつ波に替らぬ色を我相生の願ひをかけ、天王寺の亀井の水に後の世をやくそくし、渡部福嶋道頓堀遊興して隙をうかゞひ菊之介を呼寄、「此たびの下りは別して大坂の旧跡が望ではなけれども、わもじに逢たさに下りました」「それならひとりござらいで、つれ衆がじやまになつてしつぽりと逢はれぬ」「それも成ほどがてんなれ共、物の心が皆このやうなもので、人の気のつかぬやうにいたさねばならぬ」「それなら今度ははやふ上りて、またゆつくりとするやうに下らしやれ」「成程そのやうにも仕ましょか。まづ明るは一日生玉の茶屋にて逢べし」と、只二人出合てぬめりありき、晩京より九つ時分まで枕の数を重ねて上り、それよりしていよく懇志になり、折ふしは下りて三四日、(8才)

【挿絵】(8才) 【挿絵】(9才) ある時はよひのぼして五七日、十三里へだて、の男色、身もがな二つ、面白きは衆道、かぎりなきは女

色、見あかぬは笑らひ兒、そひあかぬは人肌。光陰滞なくして、今ははや若君十一才に成給ふが、住はてぬ世と知りしかど情なきは露の命、伊織祐好清も過にし春の半より風の心地と見えつるが、頼すくなくなり給ひ、次第におとろふ身の露の、よどの、床に打ふして、未来にせがむ脈の筋、薬も針もきかばこそ、終に行道とは兼てしりしかど、きのふけふとは思はずして名残をしげに書置し、「我むなしく成ならば、若をば古郷関が原へ送り給へ」と是を最後の言葉にて、三十七才夏の夜の涼しき月の都路へ、いま九重を去り給ふ。人々夢のおもひにて、闇夜にともしのきえしごとく(9才)一かたならぬなげきのいろ、「御家の破滅」と悲しみてあきれはてたる計なり。君も打ふし取籠り歎き入せ給ひしが、漸有て顔をもたげ「これもおもへば悔むまじ。愛別離苦のことはり驚くべきにはあらねども、此殿の我ゆへにあこがれ給ひし事共をおもへばいとゞかなしくて、さらば老たる身でもなし、四十にもたらずして夢の覚たるごとくなる。跡に残るみづからは、何となるみの塩たれて、住甲斐もなきうき身やな。われをもつれて行給へ」となきがらにしがみつき、おしうごかして泣給ふ。扱しも有べき事ならねば、御からを鳥部野の煙となし、御遺言に任せ新黒谷蓮海房の御寺へ遺骨を納め、さて若君に向はせ給ひ「おもひもよらぬ事により、忘れ形見をあ(10才)だにして、あやめもわかぬみどり子を、踏もならぬ旅の空、田舎にすつるかなしや」と只さめくと泣給へば、成人や人は毒性が恥かしき。若君少もまるびれ給はず、「何を歎かせ給ふぞや。御遺言にて候へば、先



図10 巻八 8ウ・9オ

一たびは美濃に下り、天晴先祖の名をか、げ、やがて上り逢申さん。母へは、只一すじに先立給ふ人々をよく、巾ひ給ふべし。かならず歎かせ給ふな」と、名残のたもとをふり切て下らせ給ふ御心、健気にもなをあはれそふ、枕さだめぬかりの宿、関路の鳥も心せよ、別れくに成給ふ、人一代の中なれや、他人の袖もぬれぬべし。それよりも姫君は、せんげんたりし御ぐしを情なくも刺こぼし給ひ、其名を真空と号し、月琢の御たちを捨て「都は人目(10ウ)物うし」と、津の国茨木の里に乳母がゆかりありければ、むかる草庵を結び給ひ、ひきこもり御座心のうちこそ殊勝なれ。むかしに今は引かへて、花待がほの時勢もなく、月に友よぶ琴の音も、いつしかまれにもあらしふく、みむろの山の山彦か、心ほそさよけんくと、遣水の竹の雫に、我命つなぐや懸樋のあまり水、田堀草きりの声ばかり、たまくと事とふものとしては、片言まじりの罌粟坊主、あまり侘しく徒然さに、

夕ざれや黒木焼家にたつ蚊遣り
只明暮に父母妻の好清尊霊 花月清頓の御回向ひまなく、櫛の水を手向、かすかにならず鉦の声、まどろむ中もその鉦を枕とし、見る夢も心から恋しき(11オ)人を幻にうつ、なく暮し給ひ、命日には程とをき新黒谷の御旧跡にはこびならはせ給はねども、ひろはせ給ふぞいたはし、。

念誦の道行

花のすがたを墨染の御衣も袖ひちて結びし水か泪かと、物うき竹の杖ならで御ちからなるものもなく、召もならはぬさうあいに御足をいたましめ、比しも夏の中空に、池田いたみの賤の女が声はりあげて田草とり、歌は恋なりうらみなり。げにや誠に、我殿と宇治の名所をみんためにつれて、こはたの里ちかきしげりの本に立どまり、とりあへず「賤や賤、青田のうちは瓜とらじ」と口ずさみしをおも

ひ出、石山寺の道すがら、心ぞ通ふ(11ウ)さ、め言まざくと忘れず、たゞいにしへは月にたとへし君なれど、そのひかりなき深山辺の里の瓦を焼煙、高槻みちの松の並木の風の音物すごくもたうくとたり。むかふの明神ふし拝み、「此神の名にしあふすいじやくは西方の教主弥陀如来。只たのめ頼もしや。極楽世界にみままする観音の蓮台に半座を分てまち給へ。むかふの阿弥陀」と観念し、桂の川のまんくと磯の波風さつとたり。行は都のかげ見えて、いとさなみだの笠のうち、誰かはそれと白菅の、ひも引しめて行ほどに、東寺四つ塚鳥羽畷、淀横うちの馬車、悪る口いふもおそろしく、たどりとて今ははや、新黒谷につきたまふ。先御墓にかしこまり、水を手向目をふさぎ、しばらく(12オ)く礼し見給へば、ふしぎや、経木に書し「清頓」の二字替り、「了雲」とかきてあり。姫君ふしぎ晴やらす宿坊に尋給へば、蓮海そつとも狼狽給はず、「成ほど、御位牌の通りに書たりしが、正く愚僧が手跡にてもなし。いかさまふしぎ」と覚しめし、さまざま思案仕給へども、それごとこ、ろつかさざりけり。真空の給ふは「是にあそはし給はれ」と御鼻紙をさし出し給ふ。「かしこまりし」とかき給へば、姫の御首にかけ給ふ血脈の袋に納め給へば、ふしぎや、けちみやくの袋に「清頓」の二字ありくとすはりてあり。「扱は尊霊の我に執心はなれ給はずとおぼへたり」と御念仏おこたり給はず。「さてしも此了雲」といふ文字こそ心得た」といろく心をは(12ウ)たらかし、「ましてしはし、守護袋に我つまの書置給ふすさみあり。若これにもや有べきか」と取出し給へば、「浅山弁左衛門忠栄尊霊廿七才慶誉了雲」と書付たり。「扱は疑ふ所なし。二人のなき人執着の靈魂離給はずと覚たり」と宣へば、蓮海つくくと見給ひてしばらく観念ましまして、「寔にこれは末世のきどくかな。それ人は貴賤男女とへだちても本来本一体なり。御身またそれに同じ。いよく信心まします」と、「迷故三界城。悟故十方空。本来無東西。

何処有南北。極重悪人無他方便。
唯称弥陀生得。極楽南無
阿弥陀仏」と唱へば、真空感涙肝
に銘じ称名ともろともに御下向
なされしが、それよりも観喜の
おもひいや増て、雨にも (13才)

【挿絵】 (13ウ) 【挿絵】 (14才) 風
にもなづみなく、毎月忌日くく
御参詣なされしが、ふしぎや、
経木の改名以前のごとく月々に血
脈のふくろに入かはり、御墓に

はまぎくくとつまの兄分浅山の改名「了雲」との二字、経木にうつ
るぞふしぎなれ。扱年月を重ね、今ははや三十六度の文字 威 入
かはり、七十二字にて最早あき所なごと見えしが、真空も御墓のま
へにて合掌あり臥給ふと見えしが、直に御とし三十二才にして、
うつ、とうせさせ給ひけり。やがて御からを梅檀の煙となし、則
同じ石塔の中へ遺骨を納めたりし、世にためしすくなき事共なり。

世の中は市のかりやのひとさはぎ
だれものこらぬ夕ぐれの空 (14ウ)

大見の目寝

さるにても息災なるは源七なり。かくのごとくの事共をみなく、人
手にもかけずと行ひ、兼年と送る程に七十ちかく成行けども虫
腹も起らずして、比は正月はじめつつかた、鶯のこ多臙にて、何心
なく東山道の草道ふみ分けてしどもなくありきしが、余り寝むさにと
ある所にでつかりとしばし睡りて居たりしが、ふと目をあき「これ
はしたり」と、したる清水にて顔を洗ひ我影を見れば、いつとも
なしに寄年の白髪たる鬢の髪 髭は畦に成ほど皴緩み、俄に興覚

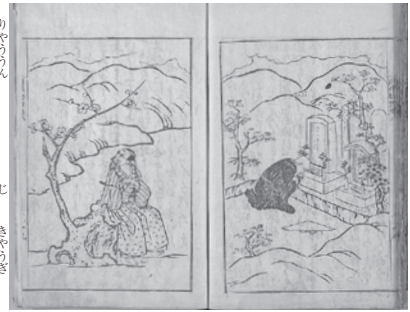


図11 巻八 13ウ・14才

てまた本の座に直り、「実もつとも理りなり。あまたの事を見送り
たり。見聞ばかりか手に掛たり。誠なるかな、幾ばくの沙汰。はじ
め (15才) あり終あり。生あり死あり。善あり悪あり。明るは暮る
に連だち、密は顕る、事を願ふに似たり。小きより大きはなし。俗
あればこそ出家。人を扶る武士、本民の守なり。顔おのれはいか
に。扱もいなものじや。うつかりひよんとなりしも髭白きゆへ」
と、木立を見れば花かんばしく、座する所は梅の切株。

右の物語は名譽博学の才をまぬるにあらず、或は文師連誹に委キ
人の作口を舐ル共しらず。聞しを思ひ見しをくらべて、愚筆をな
らぶるに目下の嘲を忘れ、予が盲 (15ウ) かりし窓に音信ル友の
一興にもと而已。

作者洛下

森田吟夕 (撰) 印

宝永三丙戌曆孟春吉旦

洛陽書肆

栗山宇兵衛 板行 (金萬) 印 (16才)

訂正

前号掲載分に以下の誤りがございました。この場を借りて訂正申
上げます。

三十二頁、上段、十九行目 (訂正箇所を傍線で示した)。

【誤】 尻をよれまつはせく申かくれば、
【正】 尻をよれまつはせて申かくれば、

付記

本稿は、日本学術振興会の科学研究費助成事業（研究活動スタート支援、課題番号22K20014）の成果の一部である。

（二〇二三年十月二十五日受理）